

一般演題B-1

被虐待児として保護せざるを得なかった2症例

加藤美穂子¹⁾、田島隼人¹⁾、大澤弘勝¹⁾、長坂昌登¹⁾、山崎嘉久²⁾

あいち小児保健医療総合センター 脳神経外科¹⁾、総合診療部²⁾

眼底出血を伴う硬膜下血腫(SDH)を認め被虐待児として保護せざるを得なかった症例を経験した。症例1) 生後2ヶ月時、焦点が合わないことを主訴に近医眼科を受診し眼底出血を指摘された。白血病等を疑われ精査を受け、SDHを認めた為児童センターが保護した。症例2) 生後6ヶ月時、家庭内で転倒後痙攣を生じた為、救急隊搬送により救急病院を受診した。診察後帰宅を許可され、翌日脳神経外科を受診した。翌々日再び痙攣を生じ救急隊により搬送受診となった。SDHと眼底出血を認め、児童センター通報となった。2例とも病院の指示通り複数回の再診を遵守していた。児童センターとのやり取りからも最終的に受傷機転は判明しなかった。SDHと眼底出血、その他社会的背景から被虐待児として保護されたが、眼底出血を伴う乳幼児期SDHの対応の困難さを示している症例と考える。

一般演題B-2

被虐待児の歯科検査事例

都築民幸^{1, 2)}、岩原香織^{1, 2)}、佐藤喜宣^{2, 1)}

日本歯科大学生命歯学部歯科法医学センター¹⁾、杏林大学医学部法医学教室²⁾

医療従事者には、身体的虐待やネグレクトを受けた子どもに対し、医療を提供するのみでなく、彼らの身体に残された医学的徴候を判断し、虐待の有無や成育状況を評価することが求められる。演者らは、虐待を受けたことがほぼ明らかな児に対し、歯科検査を行ったので報告する。

上唇部への打撲の既往がある児において、明らかな口腔内の外傷や外傷痕が認められることは少なかった。これには、外表からの外力が、口腔粘膜部までに至らなかったこと、口腔粘膜部の外傷は治癒しやすく、瘢痕を形成しにくいことなどが考えられ、受傷の早期に口腔内の検査と記録が必要であることが示唆された。一方で、歯の実質欠損を来すような外傷や、長期間の口腔内衛生の不良により発症するう蝕については、長期経過後も判断可能であった。

一般演題B-3

SBS の眼底所見とその傾向

中山百合

国立成育医療研究センター 眼科

背景: 本邦では Shaken Baby Syndrome (SBS) の眼底所見をまとめた報告は少なく不明な点がいまだ多い。

方法と対象: 診療録に基づく後ろ向き調査研究。当院で網膜出血を伴う SBS と診断された症例を対象とし調査を行った。A 群: 急性硬膜下出血のみ、B 群: 急性硬膜下出血 and/or 頭蓋内病変に分け検討を行った。

結果: 眼底出血と診断された SBS は 30 名 (男児 18 名、女児 12 名) で、受傷時月齢は生後 1 ヶ月から 18 ヶ月 (平均 7.1 ヶ月) であった。両眼性網膜出血 25 名 (83%) であった。頭部疾患は、A 群: 急性硬膜下血腫 18 名 (60%)、B 群: 急性硬膜下血腫および頭蓋内病変の合併は 9 名 (30%)、頭蓋内病変のみ 3 名 (10%) であった。網膜出血の多い部位は視神経乳頭と眼底後極部の網膜血管周囲であった。出血部位の広がりには両群間の差を認めたが、統計学的に有意であった出血部位には両群の差異を認めなかった。

考察: 硝子体と網膜癒着部に網膜出血の傾向は強く、重ね合わせ手法では網膜出血は硝子体牽引説を支持する結果となった。

一般演題B-4

乳幼児の急性硬膜下血腫と受傷機転に関する検討
～自白、裁判を通して認定された虐待症例との比較～

横田千里、埜中正博、押田奈都、中島 伸、山崎麻美*

国立病院機構大阪医療センター 脳神経外科、愛仁会高槻病院小児脳神経外科*

急性硬膜下血腫は小児の頭部外傷において虐待の関与を疑う徴候の一つとして知られている。当院で入院治療を行った急性硬膜下血腫のうち6歳以下の37例を対象とし、これらを自白または裁判により虐待が明らかである(虐待群:7例)、第三者の目撃により事故が明らかである(事故群:4例)、虐待が疑われるがその受傷機転を証明できない(不明群:26例)症例の3群に分け、眼底出血などの特徴、及び明らかとなった受傷機転について比較検討を行った。結果、受傷時の年齢については事故群より虐待群・不明群の方が若年傾向であり特に1歳未満において虐待の関与が疑われる例が多く認められた。眼底出血は事故群0例に対して虐待群及び不明群に5割以上と高率に認められた。また、虐待群では自白または裁判で明らかになった受傷機転として、従来の硬膜下血腫の機序として知られている揺さぶり以外の機序が認められ、虐待群:2例(50%)、不明群4例(15%)では予後不良であった。

一般演題B-5

小児虐待による頭部外傷の現況
～頭部外傷を全例受け入れている施設での検証～

山中 巧, 原田敦子, 山崎麻美

愛仁会高槻病院 小児脳神経外科

小児虐待を見逃さず適切に対応するためには、頭部外傷全体における虐待児の頻度や特徴を把握しておく必要がある。当院では2012年4月から、重症度を問わず頭部外傷例を全例受け入れる体制を構築しており、現在までの診療状況について報告する。

<対象>上記期間中に当院で診療を行なった頭部外傷例および虐待例。

<結果>120名の頭部外傷患者を一般および救急外来で受け入れた。このうち虐待と判断したものが3例であった。

<考察>期間中に経験した虐待児では、繰り返す入院、複数の皮下血腫、激しい頭蓋骨骨折、もともと存在する硬膜下血腫内への新鮮出血、という特徴がみられた。虐待児に対してさらに的確な診療が行えるよう、現在CAPS(child abuse prevention system)を構築中である。